



Title	懐徳堂遺聞 : 并河寒泉と其の周邊
Author(s)	羽倉, 敬尚
Citation	懐徳. 1942, 20, p. 22-29
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/89088
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

懷德堂遺聞

——井河寒泉と其の周邊——

羽倉敬尙

懷德堂掉尾の教授として、碩儒贈正五位井河寒泉（字鳳來寒泉は號）が居つたことは、寔に學堂の最後を飾つたものと云つてよい。寒泉は、享保年中、一時學堂の賓師であり、五畿内誌の著者である贈從五位並河誠所の後（誠所子無く弟天民の季子尙誠を養子とす、尙誠の子寒泉）として、又中井竹山の外孫（竹山の季女尙誠に嫁し寒泉を生む）として、縁誼兩つ乍ら、眞に是人といふべき地位にあり、是人にして、よく先師の遺業を傳へ得たと云ひ得る。

寒泉に就いては、「懷德堂考」の記載、詳にして密であるが、私は寒泉の本宗、京都井河家に有縁の關係から、其の後、寒泉について留意してをると、私の亡父の義兄、篆刻家可亭羽倉良信が寒泉の刎頸の友であつて、二人の間には、御互ひ先に死んだら、墓石の字を書くの約束が結ばれてをつた處、明治十一年寒泉が八十三歳で先歿（可亭は同年八十歳、明治二十年八十九歳で歿した）したので、今

の大阪上本町四丁目誓願寺の寒泉の墓石の字は約の如く可亭の手で記されてゐる。「懷德堂考」に依ると寒泉は廣く交らずとあるが、一旦交れば頗る深く、可亭は正に其の一人であつたらしく、可亭が、明治四年二月、其の友人大掌典松尾相永の執奏を経て畏くも、明治天皇の御璽參顎を刻して奉上した時、寒泉は左の一詩を可亭に贈つてをる。

可亭荷田兄（荷田ハ羽倉氏ノ姓）、性慧巧、若キヨリ最モ鍊筆ニ妙ニシテ、聲名四方ニ遍キコト久シ。明治辛未ノ歲肇メテ搏磁ノ陶器ヲ製シ以テ自ラ娛ム。一日其ノ器ヲ一縉紳公ニ獻ズ。公大イニ感賞シ以テ珍ト爲シ天朝ニ奉獻セシトコロ、叡賞シテ措キ給ハズ。且ツ特ニ命ジテ名ヲ勒セシメ給フ。兄、恐懼シテ固ク辭セシモ優詔アリテ聽シ給ハズ。乃チ太平萬歳、萬壽康寧、天祿永昌ノ三顆ヲ東京ニ獻ズ。噫々九重ノ下、千里ノ外、秋電ノ餘輝、荷田ノ篆磁ノニツノ妙ニ閃キ、益々光耀ヲ生ズ。兄ノ喜ビヤ知ル可キノミ。鳳來其ノ押箋ヲ拜觀シ欣然トシテ一絶ヲ賦シテ以テ慶スト爾カ云フ、

雕蟲篆刻豈ニ童工ナランヤ。七十三翁童工ノ功。搏磁ヲ創意シテ玉璽ニ代フ。優詔鍊筆天宮ニ奏ス

華翁並河鳳來拜

寒泉が、親友の無上の榮譽を我事の如く慶祝した衷情が表れて居る。

慶應四年三月下旬、明治天皇大纛を大阪に進め給ひし折、外國事務總督山階宮晃親王亦供奉にて

御來阪、一日俄かに懷德堂に御成りあり、寒泉及び中井桐園の教授の實際を台覽あらせられたことは、「懷德堂考」にも見え、明治初年の盛事として有名の事であるが、親王は、學殖厚く、夙に竹山の草茅危言の如き、御承知であらせられたことも一因であらうが、寒泉の本宗京都并河家は儒醫として古く、尙友（天民の長男）の頃から、世々伏見宮家に勤仕し、尙友——尙美——尙晉其の子尙教（立齋と號し又京儒として一家をなし、明治二十六年、八十二歳にて歿）は、親王の寵眷に浴し、旁々大阪の寒泉の上に就いても言上申し上げてをつたことが首肯される。

親王と立齋に就いて左の佚話がある。親王が、京都河原町御殿に御在住の砌、御邸内に御茶席を御新築あらせられ、誰れかの筆になる一額をとの思召しがあつて、その御命が、無官の一老儒立齋尙教に下つた。尙教は、文字を按じて「致心齋」の三字を記して奉つたとのことを、私は並河家から聞傳へた。先年東京山階宮御邸に參殿の砌、永年勤仕の事務官故香川景之氏（景樹の孫）にこの事を語つた處、その額は、今でも御傳へになつてをるとて、特に、木額が楣間に掲げられてをる現場迄、私を連れて行つて、拜見させて下さつたが、落款の「并河尙教」の朱印も猶ほ昨の如く、當年の御縁故の深きものあらせられたことを今更の如く追憶したのである。この「致心齋」の三字は、按するに莊子「人間世篇」から出た語であつて、「心齋ヲ致ス」と訓すべく、茶席の額として頗る意義あるものと拜せられる。話は外れるが、親王の御弟、久邇宮朝彦親王が、當時、神佛分離等で兎角、思想界の混沌とし

てをつた頃、自ら眞親會といふ會を御興しになり、京洛の神職、儒者、縉流を御招じになつて、詩歌の會庭に託して、神儒佛三教の融和を圖り給うた折の眞親會詩歌集の巻頭に、親王自ら、「未笑而和」の四字を題し給うたが、これは、莊子「漁父」篇の語で、篇中には「眞親、未笑而和」と記してある。明治十五六年、維後の草創も漸く安定し來り、皇居の東遷後、聊か寂莫に歸つた京洛に、昔を偲びつゝあつた京都人士には、かゝる老莊などが讀まれ、それらの思想を二親五方にも御採納あらせられたものかと拜察せられる。かくの如き晃親王と、本宗并河家との御縁故で、親王の懷德堂御成りは、唯々竹山、履軒の後の學堂の有様を御覽せられるの思召のみならず、兼ねて、尙教等より御傳聞の老儒寒泉の斯學に精進の上をも思召されての御成りであつたらうと恐察し奉られる。

懷德堂については、朝彦親王にも御由緒がある。此親王、亦京都并河家に深き御由緒があり、并河家が儒醫であつた關係から、親王の御生母である、伏見宮邦家親王の女房鳥居小路氏が妊娠の際御預り申し、親王は實に并河家にて御誕生、御幼年時を并河家にて過し給ひ、尙教の祖父、丹波介尙美を傳とし給うた。この尙美の晩年には寒泉も幼時養はれたことがある。かゝる御縁故に依つて、大阪の寒泉の名は、朝彦親王の御耳にも入つてをつたことは、是れ亦想像に難くはない。親王は、人も知る、維新前、英主孝明天皇の國事御相談唯一の皇親として、勤王志士は今大塔宮と申上げ、盟主とさへ仰ぎ奉りし御方、御性豁達、學識の深き御方であらせられた。先年久邇宮家令故角田氏の生前、京

都に於て拜見した、親王御遺書中に「慶丑紀聞」といふ寒泉自筆の一書があつたが、これは、恐らく寒泉から、デキ／＼若くは、寒泉が京都の本宗を経て奉上したものかと思はれる。

親王と懷德堂乃至寒泉との關係に就いては、嘗てさる向きからも訊ねられたが、以上の事位で、具體的な事は知られなかつたが、此程、寒泉の日乘「居諸錄」(原漢文)を繙いて見ると、慶應二年十二月の條に、嘗て寒泉の門弟であり、當時、京都守護職の會津藩主容保に隨從して在京してをつた藩の御抱醫の高橋順甫といふ人が密書を寒泉及び中井及泉に寄せて、親王が懷德書院を御再興なされたき思召から、會津藩へ御内命があり、藩でもこれを御請けするには、準備もあることであるからとて、寒泉の上京を慤慮せる事が見えてをる。寒泉は此書に接し、「欣然蹶起して、是れ吾庠斯文興起の秋至るなり、勉めざる可からず」(日記の譯文)と、同月十四日息尚一(蟹街)を具して上京し、宗家に泊し、高橋氏と會晤協議し、願書其他の書類の作成提出をし、會津藩臣外島機兵衛、公用人手代木直右衛門にも面接してをる。この事は相當可能性があつたらしげ、殘念なことに、この事の實現促進に一大障礙が突發した。それは、孝明天皇の御登遐であつた。天皇の御登遐は十二月二十五日である。寒泉は同二十七日に、

コノ日、天皇、廿五日夕亥刻時ヲ以テ登遐シ給フ。嗚呼嗚呼草茅ノ臣悚懼浩嘆ニ堪ヘザルナリ
と書してをる。そして二十七日歸阪した。老儒寒泉、恰かも雪を冒しての上京折衝も遂に事實現に至

らず、心中の落膽如何ばかりであつたかと察せられるが、致し方のない次第である。御登遐に依つて、京洛の巷は諒に闇く、諸事相亦昔の如くならず、やがて、明治維新の曙光が兆し初め、學堂の再興も遂に實現せずに終つてをる。

以上の通り此事は、實現には至らなかつたが、朝彦親王（當時賀陽宮）が書院再興に深き思召があらせられたことが窺はれることで、當時、寒泉の學、漸く老境なるの頃、これも御由緒ある並河の一族の老儒であつたことが、特に御心に止め給うたこととも拜察せられる。

由來、大阪は財貨の巷、算盤の町であつて、凡そ學問殊にシカツメらしい儒學とは縁遠いところと謂はざるを得ない。然るに、三宅、中井、並河と相紹述した懷德堂の學問が、約一世紀半、この地の風教に盡し來つたことは、その指導誘掖に當つた先儒の教育態度が、單なる訓詁註釋を離れて、實用、普遍妥當的であつたことを證せられる。それだけ、この教學の後世に影響したところも大きいと謂へる。私は懷德堂の先儒が、宋學時に陸王に參じて居るが、一面、和文和學の造詣の深かつたことについて多大の景仰を致してをるものであつて、嘗つて履軒が、毛詩、國風の「淇奥」の「彼ノ淇奥ヲ瞻レバ綠竹猗猗タリ、匪タル君子アリ、終ニ譏ルベカラズ」を譯して

うちわたす淇の川ぐまのなよ竹の

なよしき君が忘られぬかも

と詠じてをるのを見たが、その詠み振りの一カドの歌人、國學者の作としても断じて恥かしくないと觀たのである。萬年、鼈庵、竹山、寒泉、皆然りで、それぞれ堂々たる和文の著書をも貽してゐる。昔の學者の中には、失禮乍ら和文の讀めなかつたと思はれる儒者、又、漢學の知識が無かつたと思はれる和學者が往々ある。それらの中に於て、懷德堂の先賢は、儒學、皇學の兩刀使ひと云ふべく、此等先賢の修めた學風に對して、日本儒學とも云ひたいが、予は之を目して、皇儒學と稱へたい。寒泉は、和歌には「登茂樹」の署名を用ひて、短冊、懷紙の類を書して居る。字の「朋來」を和訓となし、假名書きしたのである。埋れたる「登茂樹」の署名のものが、好學子、好事子の手に拾はれることを希うものである。寒泉の高弟には、中河内郡神並、石切劔箭の祠官、木積一路（號、菱水、又寛齋と稱す、今の一雄氏先考）があり、學堂の講を助けてをつた。其の縁で、立齋並河尙教の甥（尙教の弟平三尙典の男）にて少くして學を好んだ直三郎が、木積方に寄食して、一路に學んだが、惜しい哉、壯年にて歿死した。

寒泉の後は、長男早夭し、次男尙一、字は默甫、號蟹街、阿一郎と稱すがあり、若くして明敏、能く文を屬し、父を助けて學堂の助教となり、詩文稿を貽したが、慶應四年七月十九日、二十歳で病歿した。誓願寺の過去帳には、秀二郎の名も見える、法諡は秀德孝穎居士といふ。

女子の他に嫁ぎし者の外、季女閨菊と云ふが、母、中井氏（碩果の女）が父寒泉に先立つて歿した

ので、閔菊は、父の侍養の爲め、婚期を逸し、父歿後は寡居し、造幣局で、今日で云へば、家政裁縫の教授の如きに任じ、明治廿一年一月廿七日、四十六歳で歿した鰥寡寄る邊なき老父の孝養に一生を捧げた可憐なる一女性閔菊、これも懷德堂に傳統せる孝道學掉尾の實行者と謂ふべきである。斯様な次第で、閔菊死後は、寒泉の後、祭祀も絶えた様な有様であり、蟹街、閔菊の墓石も建たずにあつたので、多少の繋る縁もあることとて、予は先年、此二子の、さゝやかなる墓石を建てゝおいた。閔菊のは特に、「孝女閔菊墓」と書しておいた。

〔編者云、筆者は並河天民先生の後裔にして、文中に在る尙教といふは其の祖父に當れり。〕

